

生誕120周年記念 猪熊弦一郎回顧展 美しいとは何か／丸亀市猪熊弦一郎現代美術館／2022年4月2日(土)－7月3日(日)

猪熊弦一郎が「美しい」について話す内容は、大きく二つに分けられます。
一つは「世の中の美しいもの」、もう一つは「絵として美しいもの」です。

「世の中の美しいもの」とは、言葉通り、猪熊が美しいと感じていたもののことです。
「絵として美しいもの」とは、猪熊が自分の絵に表現しようとしたものを指します。

猪熊弦一郎(1902-1993)は画家として70年の長きに渡り絵を描き続けました。
一見すると、画風がどんどん変わっていったように見えますが、
描きたいと思っていたのは、一貫して「絵として美しいもの」でした。
生涯をかけて「美しい」とは何かを絵のなかで探究したのです。

本展では、猪熊弦一郎の生誕120周年を記念し、
その絵画表現において最も重要なテーマである「美しい」を軸に、
その画業を回顧いたします。
これを機に、みなさまの日常に新たな美が加わることになれば幸いです。

猪熊弦一郎(いのくまげんいちろう)

1902年香川県高松市生まれ。東京美術
学校で藤島武二に師事。画家として、
戦前はパリ、戦後は東京、ニューヨー
ク、ハワイと国内外で活動する。1991
年故郷に丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
が開館。1993年逝去、90歳。

【美しいとは何か／猪熊弦一郎の言葉】

作品 No.	作品名	テキスト	出典	年齢
1	宇宙都市休日	いまでもぼくは、宇宙というのが大好きです。いまもうのぼせてるのは、宇宙ですね。宇宙の世界というのが一番いまおもしろいです。だから、ぼくの絵はいま、宇宙的な絵をかこうとしてるわけですね。まあ、地球はみんなだいたいもう知り尽くされてるから、これからは宇宙だと思っんですね。宇宙にはいろんな、不思議なことがいっぱいありますね。伝説だの、そんなの寄せただけでも面白いからです	「絵かきは長生きしないと」味の 手帖 1982年9月号	79歳
6	猫によせる歌	これを描いて3年経ってNY行くようになったんですけど、これは今の写実主義からあきたらなくなって、表現主義、それから今度は抽象形態に入ろうとする一つの過渡期の作品なんです。ものを見た通りに描かないで、頭で一つこしらえたものを、形をここに構成しようとする、一つの大事な作品なんです。NYに行って抽象形態になってしまう、そのまあ、元みたいな絵なんですね。パリの時代に覚えたこと、いろんなものをミックスして、作品が出来ているんですね。ですから、自分としてもこれは大事にしとかなきゃいけないと思って、取ってあった絵なんです。これはもう、今見てもね、懐かしいから。	「日曜美術館 アトリエ訪問 猪 熊弦一郎」NHK 1992年1月19 日	89歳
7	手の残した言葉	この中にはね、私の今まで描いてきた仕事のいろんな総決算みたいなモチーフが入ってます。顔があり、ハンゴもあるでしょ。これはやっぱりニューヨーク時代のやり方がみんなこう、入っているわけ。ハンゴ、このテクニックね。あそこにもあるでしょ。それから最近始めてる顔のシリーズね。それから鳥のシリーズ、鳥がどっかあそこにいるでしょ。手も描いてるね。あらゆる今まで扱って来たモチーフをね、これだけの大きな画面の中へ集結して、それでこれがどういうふうにまとまるか、やってみたわけですね。	「日曜美術館 アトリエ訪問 猪 熊弦一郎」NHK 1992年1月19 日	89歳
資8	(映像、1991年 MIMOCA開館時 の猪熊弦一郎展 の様子)	日本で珍しい大きな展示会場ですけど、そこへ作品を置いてみて、初めて、私の作品も大きな息をすること、出来るようになりましたし、もう部屋全体がですね、これでカチッとまとまりました。それはほんと、自分でも非常に嬉しいですね。だから、谷口さんの呼吸と私の作品の呼吸とがピッタリと合ったってことです。それは計算でやったわけでもなんでも無いんですけど、なんかその間に意思疎通があったんですかねえ。	「丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 オープン記念番組 guén まるが めの顔」RNC 1991年11月17日	88歳
13	婦人像	画家は自分の好きなもの、愛しているものをよく絵にかくんです。愛しているところに美があるからなんです。愛情と美ははなれることができません。	「歩く教室②美術館見学—絵の 見方かき方」少年朝日 1950年 12月号	47歳
14	マチスのデッサン	パリは自分を大切にす所だし、それが通用する所だ。自分を自分なりに、そのまま見せて居る様な人間が、かえって愛される。誰にも個性の美が解る。自分をそのまま、つくり飾りなしに丸出しにした時に、各々の美がそのままのぞいている事を知って居る。我等も、パリに居る間は何のこだわりもなく、自分を丸出しにする事が出来て一日一日が楽しく、生きる事の自由の喜びをつくづく学んだ事である。絵の仕事には絶対に自由であってどんな事も思い切ってなし得る環境が必要である。	「真の自由を」美術手帖 1955 年1月号	52歳
14	マチスのデッサン	マチス等の作品を見ても生ける裸婦よりも尚生ける裸婦を痛烈に感じる事がある。	「写実」アトリエ 1938年2月号	35歳
14	マチスのデッサン	美しさ、これは実にむずかしい事である。世界のどこにも無くそして美しく人を引きつけ得るデッサンを描き得る人は本当に優れた人である。物の、美しく楽しく、強い形を本当に知りたいものである。それには描いて描いて描き死ぬ程の好ましい努力が必要である。 私はマチスのデッサンを見るたびに敬服してしまうのである。 一、物をあれ程よく見究めて居る画家は少ない事。 一、それが自分で開いた道である事。 一、美しい事。楽しい事。 一、近代人の神経をつかんで居る事。 一、ごまかしが無い事。一つとしてうそがない事。 一、明るくて気品がある事。 以上、皆私の学びたい要素である。	「デッサンとマチス」みづゑ 1948年2月号	45歳

資2	『ヴェルヴ』第6巻第21-22号 (マティス ヴァンス 1944-48)	<p>マチス作 立てる裸婦 (1947)</p> <p>この立てる裸婦を最初見たのはヴェルヴのヴァンス号 (1944-48)、この中の色刷を通じてであった。幾多のザクロの果と、イチジクの葉のような太いペンのデッサンの中にはさまって、この本の中で一番強く私の心をとらえた作品である。その前頁に幾多の二人の女性と窓を通じて見えるオリブの樹、机の上の花皿、本など同じモチーフを幾枚の全然違った形で連作したもののようにこの絵は出ていた。私はこの絵を見て声を立てそうになるほど驚嘆したものである。いまそのオリジナルを目のあたりに見せて貰ったのであるから感激のほどお察し願いたい。</p> <p>しっかりと右側の一本の足で立ち、その側の手はいすのアームにささえられている。他の手と足は静かに休み、頭は後方に上向いて美しいあごを見せている。ぬぐいにぬぐい取って変更して行ったキャンパスの地はだがそのままに人体の肉色を適当に所々残されていて美しい表面である。アウトラインは黒色であるが左のひざと右の肩の赤色が重なっていて、全体のアウトラインの強さの中にやわらかな息を与えている。</p> <p>壁は朱窓のよろい戸も朱である。窓の外と左下方の藤いすと毛皮の敷物タピスリーは緑とウルトラである。上方三分の二を暖色に下方三分の一はその対色に、この分量は度を得て実に美しい。下方の色調は不調和音のようなもので画面にはげしい動きを与えているが、このために一そう全体に生氣を与え、上方の朱色をじっとささえつつ安定させている。新しいマチスの冒険であり発見である。</p> <p>右方のいすの上の紫色の布のスペースは人物の色と壁面の朱色と共に三つが実に美しく、平和に何の破調もなく静まりかえっている。左方よりの窓の緑、窓外の黄色の葉、いすの縦の線、ウルトラの中の黒い点、毛皮の黄色の点、タピスリーのいちまつ線の線、みな右方の静けさに対して生々と動く音楽をかなでている。神技であろう。画面に一つとして同じものはない。みなのおの異なる、所を得て反発し助け合っている。人間の立つ不可思議をこんなにしっかりと描き得た油は少ない。画面が残念ながらのびて波打っていたが私はそれも忘れて、眺めつくした。</p>	国立博物館ニュース第48号 1951年5月	48歳
資2	『ヴェルヴ』第6巻第21-22号 (マティス ヴァンス 1944-48)	セザンヌ以後、近代の絵画が、獲得した大きな三つの要素、明るく、単純化された、積極性のある、このどれをも完全に、成熟させたものはマチスだと思う。マチスは、フランス人の、優れた、優美で、高尚なセンスを持ち、自分の身のもの、一つ一つ、マチス流の、三つの要素に置きかえてしまった。私は彼の絵を見るたびに、生の喜びを、強く新しくよびさまされ、元気づけられる。我々は、最早、暗いものはまっぴらである。明るく生々したもの、これは、毎日の生活に、なくてはならない眼の糧 (カテ) である。	「マチスの奇跡」別冊文藝春秋 第19号 1950年12月	47歳
15	マドモアゼルM	山を描いて木を描き、河を描いて水を描く画家は多いが、山を描いて山を描き、河を描いて河を描く画家は少ない。それ以上に山のかなたの川にまで周到な思いを寄せる画家は尚少ない。	「写真」アトリエ 1938年2月号	35歳
16	画室	人物を描く場合、特に並ならぬ素描の力が必要だ。裸女を描く時、人体の各所にある不思議を描かなければいけない。頭の丸さ。二つの乳ふさの丸さ。腹部の丸さ。膝部の二つの丸さ。これが不思議だ。	「素描雑感」アトリエ 1935年1月号	32歳
16	画室	伸ばした手。曲げた手。立った足。休んだ足。これ等に一番安定した頭の位置。この有機的に統制された力の対称の美。球体と円筒の集合体の中に唯一のV形の美。肉体の連続の中に外形をその時によって変化し得る唯一の頭髮の形、質。	「素描雑感」アトリエ 1935年1月号	32歳
16/17	画室/バレリーナの夢想	僕は裸を描くとき、たとえば足なら足を描くということではなく、占領する色面として描いている、首も頭も単純になればなるほど、バランスとしてぎりぎりのものを要求する。その場合、たとえ自然のままのものから遠ざかっても、絵画の使命に於いていば正直なものに近づいていると思えるんだ。	「デフォルマシオン問答」美術手帖 1949年5月号	46歳
16/17	画室/バレリーナの夢想	まず私は「絵にする為の美」ということを分って貰いたい。(中略) 画面を形成する際、キャンヴァスからはなれてみた美しさが、そのまま取り入れられても決して美でない事は現代絵画の常識である。(中略) 絵を描こうとする人は、何よりもまず「絵画でなければ出ない美」「タブローにするための美」を敏感に受取る感受性を養うことが肝腎である。	「色と形」別冊アトリエ第一集 1949年10月	46歳
資1	『油絵実習帖』第二巻	<p>第一図 デッサン</p> <p>この顔のデッサンは何枚か、描いたものの中から一つ選んだものである。気持ちのいいデッサンはそう沢山出来るものではないから、出来上がった中から選ぶ事にした。クレパスの青を使って見た。消す事は出来ないが、いきなり力強く描いて行くには大変便利である。顔のアウトラインを描く時、いつも、つくづくむつかしい円形だと思ふ。適当な大きさと、張りのあるアウトラインは、実に美しく、描いて見ると仲々に難物である。デッサンの時はそのものの質のこと等が頭に来るから、その固さ、やわらかさ、等も気になるが、描いて居ると自然考える事は美しい形の円である。大らかな線を求めたくて来る。</p> <p>アウトラインの中に、まゆ、眼、鼻、口、等の造作がちらばる事になるから、その各々の形はもろろだが、それよりもその位置する場所が面白いし、むつかしくもある。一分違っても、いやな顔になるし、うまく行くと思わない気持ちのいい顔が出来上るのである。円形の中に安定するこれ等の造作のコンポジション (構図) が、まず画面に顔全体を安定させるのと同じ様に、大切である。</p> <p>髪面積は顔がしめる面積によって決定されて来る。顔のアウトラインとは違った、又一つの外かくでもあるから頭を使わなければならない。</p> <p>造作の中に二つ同じ物が出て来る。まゆ、眼、耳、等は同じになることは禁物である。何によらず、二つ以上の同じものを描く時は考えなければならない。右の眼は大きく、強く、左の眼は、単純に、左上りに描いた。耳は、反対に、左方を複雑に、右は単純に描いて見た。鼻の正面は実にむつかしい。世界のあらゆる画家が、各自思い思いの鼻を描いて居るが、自分だけしか描かない鼻は、仲々探せないものである。児童の絵を見ていると、この問題を簡単に解決して居るのに出会う。まったく自分の絵がいやになってしまう時がある。鼻だけではない、目も、口も、皆、そうである。一つ一つが面白くもあるし、むつかしくもある。あまり、いい形が描けないと、眼をつぶって描きたくなる。我々は、余りにも色んな事を知りすぎて居る。</p>	「顔」油絵実習帖第二巻 1952年1月31日	49歳

資1	『油絵実習帖』 第二巻	<p>第二図</p> <p>いよいよ着色である。私はヨーロッパに居る時から、エマイユ（エナメル）を使って居るから、エナメルのうすいヴィリジャン調の白がたえず交ぜられていることを頭において見て貰わないと、油絵具では出ない表面があるから、この点よく見て頂きたい。カンバスに、まず、クレパスで描いたデッサンを見ながら、青の油えのぐで、形をつけた。この時は、デッサンの顔よりも、やや、まとまり過ぎてしまったので、すぐエナメルをペインティングナイフ（註）で、全面に塗りつけてしまった。新しくデッサンする為と、画面の下地を作る為と、二つのねらいからである。塗りつぶしてしまった下から、ほのかに青のデッサンが透けて見えて居る時、一つの効果として美しく思った。そのかすかに見えるデッサンを思い切って単化しつつ又オンブル（影）と緑でその上に再びデッサンをつけて行った。いい形が出来ないので、又、エナメルで塗りつぶしてしまった。こんな事を三四回繰り返して行った。プルブル・ド・カドミウム（註）で所々にアクセントを置いて見た。これから後に置いて行く色彩のイメージを頭に浮かべる為、この赤はオリブ・グリーンに対して美しいと思った。描いては、エナメルを塗り重ねて行くと、全体に、画面が小さくなって来て、弱々しく、最初のデッサンの時の様なゆとりが見えなくなって来た。目も大きくしたり、小さくしたり、口の位置は、特に上げたり、下げたりで、仲々決定出来なかった。口を下げると、首を細くして見たくなくて、ちぎれる様に細くもして見た。首の太さも普通では面白くなく、細くして見て、とても不思議なものになったが、下方が軽くなって安定をかいて来たので、又縦に、二本しっかりとした首をつけた。これで安定はして来たが面白味はなくなって来た。顔と、髪の内積がうまく出来て居ない。全体の入り方も面白くなく見える。（註）ペインティングナイフ…細いコテのようなもので筆の代りにこれで絵具を塗る。プルブル・ド・カドミウム…カドミウムの硫化物セレン化合物の化合物の一種で赤色系統の色。</p>	「顔」油絵実習帖第二巻 1952年1月31日	49歳
資1	『油絵実習帖』 第二巻	<p>第三図</p> <p>塗りつぶしては形をさがして居る間に、とうとう黒々となってしまった。絵は全体に大らかにはなる。全日本の仏像が、いつも私の頭の中に浮んで来た。体の色調は何となくおごそかに、重々しく、古寺の奥に黒く光る仏像になって行く。鼻は、私の好きな形になって来た。法隆寺にある仏画の鼻を思い浮かべつつ、描いてゆく。印度のアジャンタの石窟にある仏像の鼻も、浮んで来る。東洋の鼻である。目も、横に長く、切れた目を、右方を持って来て、左右のバランスを破る事にする。眼の玉を入れて見たが安定しない。眼玉だけを削り取る事は出来ない。又眼を描く。眼玉は今度は安定したらしい。口は、まゆ、目、等に比例して、横に長く描いて見る。口の色は、オンブルにガランス（註）である。カピ色の様な緑と、この色は、到って都合がよい配色である。顔の色は、色んな沢山の色が重なり合って、不思議な予期しない色になった。バックに、ウルトラマリン（註）を使って、青くして見た。髪の色との対比が深く美しいからだ。一気に勇気を出してぐるりと黒色で力強く髪を描く。頭と首の空間の為に、あごの下も、黒くして、青白い顔の形をはっきりと浮き出させる。首は、顔の水平線に対して、縦にクトウ（ナイフ）で線をつけてみる、しっかりと彫刻の様な強さを出したかったからでもある。右方のひたい、鼻の横、口の下に、バックのウルトラマリンで、色彩のバランスを取って見た。これで、身動きできない様にも思えて来た。（註）ガランス…やや沈んだ赤色。ウルトラマリン…濃い青色。</p>	「顔」油絵実習帖第二巻 1952年1月31日	49歳
資1	『油絵実習帖』 第二巻	<p>第四図</p> <p>第三図が、見て居るとつまらなくなって来た。もっとはげしいものがほしいのだ。私は又、ホワイトとエナメルを交ぜて全面を塗りつぶしてしまった。しかし、私の頭の中にはおぼろげながら絵がある。ヴィリジャン（緑）を混ぜたホワイトとエナメルで顔の丸い色面を作った。この色面の中に顔の造作を、思い切って中心に集中させて描いた。第三図のは、周囲にひろがり気味であったから。</p> <p>口も、ヴィリジャンの強さに負けないだけの、ヴィオレ・ド・マル（紫）を使った。</p> <p>右の眼は、感激的に、強く、左の眼とは、思い切って違ったものにして見た。鼻は、前の方がよかったかも知れない。ぐっと一筆で漢字を書く様な気持ちで描いて見た。さて、背景の色であるが、ウルトラマリンでは、最早顔とは、住めない色である。ヴィオレと、オンブルを混ぜて、平たく塗りつぶす。その上に、最後の黒と、ヴィオレを混ぜた墨色で、一気に髪の色面を決定した。顔の内積は小さくなったが、この方がいい様に思われた。</p> <p>黒の分量、明るい面の分量、これでいい事にした。首は最初の細い計画をやめて、やはり太々しい、強いものをつけた。これで安定した様である。</p> <p>左下方に、引っかいてサインを入れた。</p> <p>アトリエに、もっと置いてあれば、私は又、こわして居たかも知れない。いくらでも上上と描きたくなるから、不応なしに持って行かれた。この為に案外この絵は救われたかも知れない。絵は何時見ても美しくなければならぬ。いかなる時に、切りはなして見ても、未完成のままであっても、美でなければならぬ。</p>	「顔」油絵実習帖第二巻 1952年1月31日	49歳
17	バレリーナの夢想	猫を飼っているのは随分古くからだ。昨年あたりから猫を描いてみようという気になった。今まで色々沢山描かれている猫は、どうも自分には気に入らない。それで猫の形と色を今までの人のやらないやり方で描いてみたいと思った。人物は家内をずっと永く描いているが、それと同じ気持ちで自分だけの猫を描いてみたいというわけである。別に難しい理屈はない。	「美術の秋『赤い服と猫』」報知新聞 1949年10月4日	46歳
17	バレリーナの夢想	動くものを何回もかくと形をおぼえるようになります。むずかしい言葉ですが、動くものほど造形美があるんです。	「歩く教室②美術館見学一絵の見方かき方」少年朝日 1950年12月号	47歳
17/21	バレリーナの夢想/ニューヨーク九十五丁目 の矢じるし	どんなにうまく花が描けても、ほんものの方が美しい。ところが、僕は人間のつくったものの美しさ、人間でなければできないものの美を求めているのです。そのためには抽象形態も結構、ものから取材しても、ものそのままではない何か自分の意志から生れた色なり、形なりがより美しいという時代が必ずくると思う。	佐波甫「猪熊弦一郎氏と語る」教育美術 1951年1月号	48歳
17/21	バレリーナの夢想/ニューヨーク九十五丁目 の矢じるし	新しい絵画は、だから単純化され影も日向もひとつの色面として利用する。つまり、左から光線があたっているからと必ずしも右側に影をつける必要はないのである。自然の模倣としてではなく、影はひとつの重要な色面として考えられ、画面の均整（バランス）に参与する一色素として受入れられる。だから影を左側においても、絵として美しければそれが正しいという事になるのだ。抽象絵画（アブストラクトアート）の場合、均整（バランス）の為に一つの影（色面）を、幾つかに砕いて、画面の各所に分散させる事すらありうる。	「色と形」別冊アトリエ第一集 1949年10月	46歳
17/21	バレリーナの夢想/ニューヨーク九十五丁目 の矢じるし	形式あつての内容である。もっと形に対して興味を持ち、新しい形への理解を深めて死ぬまで執拗な追求を持続したい。	「フォーラムの探求」美之園 1937年2月号	34歳

17/21	バレリーナの夢想/ニューヨーク九十五丁目の矢じるし	或人がポナールに「先生は何故あんな美しい色が出せるのか」とたずねたところポナールは、「個々の色は決して美しくはないが、コントラストによってそれは美しいのです」と答えたそうだが、このコントラスト（対比）という事が極めて大切な事である。堅い色と軟い色、曲線と直線、etc…… これら常識的な対比からそれらの複合した、珍らしい対比に至るまで美はそのなかに無尽蔵にかくされている。（中略）しかしそれ等不思議な色といふ形といひ、すべて画面の均整（バランス）を発見せんとして何百回となく塗りかえられ余計者を消去しつつした結果生じたものである事を記憶してもらえればそれで良い。	「色と形」別冊アトリエ第一集 1949年10月	46歳
17/21	バレリーナの夢想/ニューヨーク九十五丁目の矢じるし	実際このごろぼんやりしてみたいと思う。ほんとうのところぼんやりできない。とつてもだめです。ぼんやりして日向ぼっこして何も考えない時間を持ちたい。絵で申しますとたとえばいろいろな色彩がたくさん使っていますね。そのうちの白い余白、これはぼんやりしたところなのですよ。ポナールなんかの絵にも、マチスにも実にこのぼんやりの余白をうまく使っているんですね。 一つの画面でこれはどれくらい黄色さを持っているか赤さを持っているか、どれだけ美しさの度合を持っているかということがこの白い部分でよくわかるのです。全部色で埋めてしまえばおのおのが相殺し合って美しく感じない。ぼんやりの生活も充実々々でぼんやりとした余白がない場合美しくも何ともない。楽しいことばかりあっても、どれくらい楽しいかわからない。結局ぼんやりすると言う事はより大切な事で一つの勉強でもあるのです。	対談「美しい映画をつくるために」 藝術新潮 1950年5月号	47歳
18	(NY時代)	当時のニューヨークといえば世界のどの都市と比べても最高にエキサイティングな都市で、静かな日本から行った私はそのニューヨークのもっている赤裸々な人間らしい臭いや強さ、それに何が起こるか分からない怖さにまず打たれてしまった。ニューヨークにいる作家の作品がもつ積極性にも驚嘆した。日本みたいに伝統というロープでうしろから引っ張っている国じゃないから何でも思ったことはすぐにやってしまう。そしてそういうことの好きな連中が世界中から集まっていた。伝統というのは大切には違いないけれど、それだけを守っていたのでは新しい独創的な絵は描けない。今まで習ったことを繰り返すのは誰だってできる。新しいものを創るという冒険をするには勇気が必要だとその時に痛感した。	「忘れえぬ刻」新美術新聞 1990年8月11日	87歳
18	(NY時代)	深く考え過ぎたものには、重さがついて来る。広さがなくなるし意欲も縮んで、考えさせられたあげく、苦しくも、いやにもなるものだ。痛い時に、痛い大きな声でどなることのできる正直さの中には、明るくて強さがある。深くはなくて、いやなものがあるとに残らない。私はいつもアメリカの作家の仕事を見るたびに、これと同じ気持ちを感じる。ひとつひとつの行動の裏に他人の気持ちまで考えてゆこうとすることになってきた私たちには、おおよそ持っていない明るさであろう。アメリカに、いわゆる「アクション・ペインティング」といわれる、自発性をそのままぶつけてゆく傾向の起こったのも、よくわかるのである。今では世界にこの影響を広く与えたことは事実だが、ご本家のアメリカ作家のような、ずばりそのものといった作風は、他の国のものにはあまりみられないようである。この国のもつ底ぬけのくったくのなさが、行なわせたひとつの自然の姿であるからだ。	「ニューヨーク 傍若無人の女流画家」朝日新聞 1961年1月3日	58歳
18	Yagibushi	（《八木節》について） これはアクション・ペインティング、アクションで描いてますけど、今見ても、もう少し、描いたら描けたのにとおもいますよ。思い切ってやったつもりでも、やっぱり弱々しいですね。僕の性格が弱いのもかもしれませんけど。こうすればこうなるだろう、という計画的なテクニックの使い方がないで、アクションですから、偶発性を肯定したわけですね。偶然出来た面白さとか、そういうものは一つの発見ですから、思い切り描いて、いいものはそのまま肯定するし、悪いものはまた消してしまっていて、まあ、そういうテクニックの時代ですね。	「日曜美術館 アトリエ訪問 猪熊弦一郎」NHK 1992年1月19日	89歳
19	Confusion and Order "A"	人間のコンフュージョン・アンド・オーダー（混乱と秩序）というのが、このごろの僕の絵のテーマなんです。（中略）僕のアトリエの窓の外の色が、そのままそうなんです。だから見まいと思っても、そういうものが入ってくるんです。（中略）まえから人間の世界はコンフュージョン・アンド・オーダーだと思ってはいました。芸術家はそれとキャンパスのうえで取り組むことができる。（中略）そこではどんなことをしても人が罰することのできない世界がある。（中略）自由な広い画面をもっている。そのなかで自分が一つのオーダーを与えることができるわけですね。	インタビュー「ニューヨーク美術界の近況」みづゑ 1965年8月号	62歳
19	Confusion and Order "A"	私は、美とはひっきょうバランスだと思う。コンフュージョン（混乱）とオーダー（秩序）はどこの世界にも絶えずあるがこれは表裏一体のものだ。絵もつきつめていけば、そういうことになるのではないかと思う。いい絵は、どんなに乱暴な描き方にみえてもちゃんとした秩序がある。色、形、重さ、軽さ。そういういろいろなものの調和がとれている。具象にしても抽象にしても、絶対にそういうものがなければいけないと思う。	「私の履歴書 猪熊弦一郎 ①勇氣」日本経済新聞 1979年1月1日	76歳
19	Confusion and Order "A"	写経を書く時のような気持ちで、一つ一つのタッチが、おろそかにしないで、ピシャリ、ピシャリ、ピシャリと置いていく、その態度ね。そういうものは自分に対して、いつも厳格にしたいと思うんです。それであの、自分も非常に楽しかったです。時間がかかりますけれども。	「テレビ美術館 No.62 猪熊弦一郎 限りなき脱皮 フォルムのパレードとバランス」テレビ番組 1976年頃	73歳頃
19/20	Confusion and Order "A"/The City (Green No.4)	近代都市のなかに住むものが、都市のもつ生活機構のなかでさまざまなものを感じ考えることは当然のことである。私のさいきんの仕事は、この10年間ニューヨークのなかに住み、強力な歯車の回転のなかでもみにもまれながら知った。私はこの現代都市の持つ不思議な生命の魅力をいろいろな感じ方で絵にしてみたいと思った。現代都市の持つ混乱と秩序を、ある時は物であり、ある時は心でもあるように……。	「夜祭」朝日ジャーナル 1966年1月23日	63歳
20	The City (Green No.4)	外から見ると縦の線と、横の線できているジオメトリックなニューヨークは、巨大なるがゆえに持つ特殊な美を持っていますし、また、そのデタイクにはまったくおもしろくかわいい自然がたくさんかくされている、ほほえみ多き都市です。（中略）縦と横の大きな立体の中に、さまざまな人間性が大きめに強く、そして、静かに荒っぽく、住んでいます。巨大なる人間都市です。	「都市」毎日新聞夕刊 1969年5月28日	66歳
20	The City (Green No.4)	近作は都市計画とか街（まち）の題名通り、ニューヨークのジオメトリックな区画や町の印象をコンポジションしたものです。自分自身がその中を歩いてみたい、そんな心の中の散歩道なのです。	インタビュー「渡米15年の成果 問う猪熊氏」四国新聞 1969年6月6日	66歳
21	ニューヨーク九十五丁目の矢じるし	要らない具象的なものをだんだん除けていって、絵に最も必要なものになろうとする意志に結晶していったわけです。見たらすぐ、顔とか手とかいうものではなくて、一番大事な形の極限みたいなものに挑戦していった。そうすると結局、丸とか三角、四角になっちゃうんです、形ってものは。	「具象から抽象へ」RNCエリア情報124号 1982年10月	79歳
21/22	ニューヨーク九十五丁目の矢じるし/花嫁のスケジュール	抽象画に大切なことはコンポジション（構図）で、これが完全にできなければいけません。線や円や三角の位置を一定の枠の中にピタッと納めること、これは長い間研究し経験を積んだ自分の感（ママ）が決めてくれます。音楽の世界も同じことです。イタリ語のオペラは意味が分からないし、ピアノのメロディーは強・弱の音の連鎖です。しかし感動したり、美しいと感じたりしますね。これらは我々が知らず知らずのうちに、日常抽象形態に接触していることです。	「ホノルル美術館 抽象画家 猪熊弦一郎絵画展」EAST-WEST JOURNAL 1982年2月15日	79歳

21/22	ニューヨーク丸十五丁目の矢じるし/花嫁のスケジュール	図案で一番バランスのいいのは○(マル)です。○が私は一番安心できます。四角の中に○がある、という状況が最高のバランスなのです。だから日本の国旗、日の丸というのは最高の図案ですね、最高のバランスです。	「小説新潮の"顔"を描いて三十五年 猪熊弦一郎」『いまこの人が好きだ』椎名誠 1983年3月(初出1981年12月)	78歳
22	花嫁のスケジュール	(《花嫁のスケジュール》について)私の今やっているのは、この四角を描いても、この四角を真ん中に描いてあるんでなくて、左、右によつて四角なんです。で、決して真ん中にある手の形ってものは、真ん真ん中になんていんです。それはもう、ちょっとはずしてあって、そして全体がガタガタにこう、傾かないようなバランスをとるために、ここへ小さいオブジェがたくさん並んで、その強弱によって全部釣り合いがとれるわけなんです。	「美の世界 ニューヨークの一個のリング 画家 猪熊弦一郎」日本テレビ 1980年頃	77歳頃
22/23	花嫁のスケジュール/星座からの返信	私の絵にリクツはありません。絵は楽しいから描くの。人が好きですから、人が来るのもうれしいです。出かけるのが好きで、映画やダンスも大好きです。大きなキャンパスに、自由に絵を描いていると、私の思いが次から次に発展して、思わぬことが起ります。夢のように発展していくアイデア、マルを描こう、点点を描こう……。それが私の絵です。	「猪熊弦一郎誌上展」暮しの手帖 1987・88年12・1月号	85歳
22/23	花嫁のスケジュール/星座からの返信	私はハワイに住むようになって、色のコントラストが非常に鮮やかになりました。これは東京やニューヨークでは決して出来ない色彩です。底抜けに明るいハワイの環境が大きく影響している筈です。色のコントラストというのは二つの色を隣り合わせて並べそこから出来る新しい違った色の美しさを創り出す技術を知っていきなくてはなりません。そして、それは学校でも、先生でも誰から教えてもらうのでもなく、全く自分の長年の体験から得するものなんです。	「ホノルル美術館 抽象画家 猪熊弦一郎 企画展」EAST-WEST JOURNAL 1982年2月15日	79歳
22/23	花嫁のスケジュール/星座からの返信	白を大いに生かすことだ。というのは他の色を白と対照させることによって、生き生きとしたものができてくるからである。画家の間でも、白をいかに使いこなすかということで、その人の技量がわかるとさえいわれている。	「表紙解説」アサヒカメラ 1950年4月増大号	47歳
23	星座からの返信	私は、アトリエへ来る若い人たちに言う。君の絵の色彩は古くさい。フレッシュさが無い。まずもっと思いきった色を持ってき(ママ)、周囲をその色にマッチさせてゆき給え、と教える。	「強烈な色彩」ドレスメーカー 1950年1-2月号	47歳
23/24	星座からの返信/緑の中の美しき顔	今回展も顔を出しますが、動物もいるし、機械的な抽象形体もある。(中略)抽象とか具象とかにこだわらない。フレキシブルに動いていく。	「猪熊弦一郎 人と作品」アート・トップ 1990年10・11月合併号	87歳
23/24	星座からの返信/緑の中の美しき顔	異なる形の厳密なる均衡の中に美しきがあり、統合の美が生れる。	「フォルムの探究」美之園 1937年2月号	34歳
24/25	緑の中の美しき顔/顔31	絵は明かるいということをお忘れください。これは黒い色をつかったらくらくらするということではなく、黒をつかって明かるさがでなければいけないのです。ぼくたちの会のものはこの「明かるさ」と、それからできるだけいらぬものはかかないように、まただいたんに青と思えばいきなり青くぬってしまうその「せっきょく性」を学ぼうとはげまして勉強しています。	「歩く教室②美術館見学一絵の見方かき方」少年朝日 1950年12月号	47歳
24/25	緑の中の美しき顔/顔31	抽象の形態ってもので我々は出来ている。人間の体全体見てもそうです。髪の毛一本とってもうさうだし、目一つ、鼻一つ、口一つとって、みんな抽象の形態で出来てるものの総合として人間を見るだけでもって、バラバラに鼻だけ大きくしてテーブルの上に置いてみると、一つの抽象彫刻、大きな彫刻なんですね。そしてそれをもっと大きくして、ブロンズにでもすれば、子供の滑り台にもなったり、穴があってそこに滑り込む遊び台にもなったり。そういう一つの不思議な形態で人間の顔は出来てるわけなんです。	「テレビ美術館 No.62 猪熊弦一郎 限りなき脱皮 フォルムのパレードとバランス」テレビ番組 1976年頃	73歳頃
25	顔31	ハワイの太陽光線がとてもよいのです。太陽が明るく、空もきれいですね。そんな自然が好きなら、人のいない場所へ行けばよいのと言われますが、ぼくは人間が好きなのです。ハワイは自然が明るいし、大勢の人に会えるのも楽しい。	座談会「これからのきものと美しさについて」きもの研究 1985年冬号	82歳
26	飛ぶ日のよるこび	画面を白く塗りつぶしてしまっただ後に一匹の水鳥が飛び下りて来る。水が無いのに泳ぎたように歩く姿が可愛く、水を描いてやる。青い水にしようか、黒い水にしようか、泳ぎ出すと、影をうつして流れるが、影はいらない。ただ、うれしくて泳げばいいのだ。一羽が泳いで居るとあちらからもこちらからも友人鳥がやって来て、にぎやかな事である。一羽また一羽私は鳥を描き加えて行く、白い鳥も、緑色の鳥も、どれもこれも皆私が作り上げた名もない鳥だ。大きくも、小さくも、長くも短くも、自由である。脚長鳥も、短脚の鳥も。	「白いキャンパス」読売新聞夕刊 1990年10月20日	87歳
27	鳥4	我々は素描によって形の外に線と質、色と量、構図変形単純化、動き、空間等と共に、素描の中に追求しなければならぬ多くの問題が残されて居る。それは終世、素描に興味を持ちつづけるもののみ与えられた特権である	「素描雑感」アトリエ 1935年1月号	32歳
27	鳥4	線だけで立派に質も量もあらわれれるものです。だからと一本の線でつながるのではなく、裏側から又側面からきた線、一本の線で、アウトラインを、描かずに、奥からきた方向を意識しながら線を重ねつつ描いてゆかなくてはならない。つまり面を意識の中にしっかり入れて描いてゆかなければなりません。	「人体デッサン(二)」教育美術 1950年6月号	47歳
27	鳥4	線はどこまでも形であり、質であるから筋(すじ)ではないし、色をかこって置く境界線でもないのです。	「線」三彩 1948年7月号	45歳
28	黒い裸子と馬	学校(普通寺高等学校)の窓から騎兵隊の訓練の様子が手にとるようにわかる。私はその馬の美しい姿が好きでたまらなかつた。そして馬の持っているあの独特のにおいが好きだった。そのころ、姿の美しい馬ほどよく駆けよく跳ぶことを私は知った。むずかしくいえば様式美と機能美は一致するものだとこのことを目のあたりに納得したのである。	「私の履歴書 猪熊弦一郎 ⑥山地先生」日本経済新聞 1979年1月7日	76歳
28/29	黒い裸子と馬/建築と裸婦	人間の体は神様が作った芸術品だから美しいのですよ。	座談会「これからのきものと美しさについて」きもの研究 1985年冬号	82歳
29	建築と裸婦	いまでも建築が芸術の中で一番素晴らしいと思っています。	対談「現代都市と絵画」aaca 1993年3月	90歳
29	建築と裸婦	単純化ということは物を簡単にすることは違う。簡単は軽薄になりがちであるし、弱々しくなる。絵に求める単純化は多くを知りつくし、そしてその必要の最大限を無駄をはぶいて単化するをいうのである。強くそして美しい近代の建築はそれを立派に実行している。無駄な装飾は取り去られ、形と線のバランスを深く考えながら現代の美を語るのである。	「白の都 名古屋の印象」中京新聞 1949年10月7日	46歳
29	建築と裸婦	抽象絵画って建築で言えば機能主義みたいなものですね。あれだけ建築も変わって来ています。それだけじゃいけない。そこへ人間が入らなきゃいけない。人間性ってものがどうしても必要になってきますもんね。現代の絵画にしても建築にしても。それをもういっぺん、僕は考えてみるわけです。	「日曜美術館 アトリエ訪問 猪熊弦一郎」NHK 1992年1月19日	89歳

29	建築と裸婦	パークアベニューにシーグラムビルが誕生した。ニューヨークには数多くの高層ビルがみられるが、こんどのシーグラムビルはまったく頭がさがる思いである。ミース・ファンデルローエの作品はシカゴでもみたが、これは一段と出色のようである。現代をこれほど強く、清純に打建てた建築をみたことがない。(中略)まったく堂々たる景観である。美しい。全館に灯をいれ夜間にそびえる姿は、ちょっと、ほれぼれしてしまう。絵にも、彫刻にもない美であり、過去にもみられない違った壮観美である。そして洪い。これが私をこよなくひきつけた。ただの新しさや、奇観ではない。それに現代の優れた人の正直な姿でもある。	「シーグラムビル」読売新聞夕刊 1958年3月31日	55歳
29	建築と裸婦	直線の中にまるがあるからまるが美しくって直線はまた、まるがあるから美しい。(中略)まると四角があって、柔かい曲線に対して固いもの、この二つのコントラストで新しい美が起こっているのですね。だから、こういう四角い中に皆さんのイレギュラな人間が存在するってことで別に美が浮かんでいるのですね。	「もう一度不思議を(1982年9月16日講演)」SPIRIT 1984年香川県立丸亀高等学校	79歳
29	建築と裸婦	私達画家は平面なものの上に仕事をして来て居るので得てして空間をいかに持つ可かかに対しての質問を忘れ勝ちである。出来るかぎり、立体の持つ空間の占領の仕方を考えて見なければならぬ。	「夢みる椅子」芸術新潮 1951年5月号	48歳
29	建築と裸婦	アリゾナの砂漠を五日間かかって、水平線ばかり見てたところへ、摩天楼の垂直線をいきなり見たのですから。垂直線は人間がつくるもんだなと考えましたね。大きな建物、どうして人間はこんなに上へ上へと伸びていくんだろうか、その意志と欲望と言いますが、それには驚かざるを得ませんでしたね。	「具象から抽象へ」RNCエリア情報124号 1982年10月	79歳
29	建築と裸婦	大抵、家の中に人間はこうやっておるものだと思って概念的に考えているからなんともないですけど、本当は、この直線の中に人間が、イレギュラな形が行動しているって事は、大変面白い対比なのです。	「もう一度不思議を(1982年9月16日講演)」SPIRIT 1984年香川県立丸亀高等学校	79歳
29	建築と裸婦	建物という四角い直線的なものの中に、イレギュラーな人間のボディーが存在するってこと自体がもう不思議なんです。人間のからだには直線というのはいない。(中略)直線でもって構造的にできてるのが建築ですね。その中に、イレギュラーな形の人間が住んでいる面白さを描こうとするわけです。それをもっと解り易く言えば、コンフュージョンとオーダー。混乱したものと秩序のあるものと、この二つ、これが世の中のあらゆる物の存在です。そういうものを描こうとするわけです。	「具象から抽象へ」RNCエリア情報124号 1982年10月	79歳
29	建築と裸婦	私は仕事に疲れるといつも、三つの"心の教会"を訪ねた。教会といっても美しいビルディングのことだ。(中略)いつ見てもあきない私の心のよりどころだった。一つの空間を占領した立派な造形物をじっとみているだけで心の混乱が整理されるような高い美しさがその中に流れていた。	「私の履歴書 猪熊弦一郎⑨ ニューヨーク(下)」日本経済新聞 1979年1月30日	76歳
30	手 フィンガーブラック	自分の掌をよく見て頂きたい。小さなところにたくさん線の線がさまざまな形で走っている。これは抽象である。	「もう一度ものに不思議を持ちましょう」讃岐公論 1982年11・12月号	79歳
31	楽しい家族	心も大事です。美しいって言うことは、みんな持っているんですよ。持っていて気がつかないのね。友達同士の美しい関係。ね。言葉。ね。お父さん、家族との関係。あらゆるものに美って言うものはあるんですね。	猪熊弦一郎講演「美はいずこに」香川県立丸亀高等学校 1988年7月13日	85歳
32	丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 壁画案	(MIMOCA壁画《創造の広場》について) 子供時代に過ごした丸亀への思いと、だれもが絵を描きたくるようになるようにとの願いを込めて、落書きしたように表現した。	「丸亀市猪熊美術館 画伯ら大壁画除幕」四国新聞 1991年3月26日	88歳
32	丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 壁画案	今度、僕は丸亀の美術館の壁画も好んでばからしい絵を描いてみたわけです。それが大きな画面になったときに、どういふふうに人に受け取られるかということをやってみましたら、みんなおもしろいというのです。「何だ、こんな変な絵を描いて」とは一言も言われなかったですね。「おもしろいですね」「可愛いですね」と、もうこっちのほう意外で(中略)見る人のほうはずっと気持ちが大きいと思いましたね。だからアーティストはもっとのびのび仕事をしていいんだという自信を得ましたね。	対談「現代都市と絵画」aaca 1993年3月	90歳
33, 34	顔80, Faces 80	見渡しますと、みなさんのお顔がずっと絵のように見えます。これだけの講堂の中にみなさまの顔がちらほらしていることは、すなわち絵です。絵と同じことです。これだけの人間の方がここに空間をうずめてるってことは、立派なコンポジションです。コンポジションというのは、構図ということです。構図というのは、この空間をどういふふうにもものが占領するか、そのあり方をいうのです。ですから、この広い講堂の中にみなさんの仲間が何百か並んでいますが、それは立派な絵です。私はとても美しいと思います。これは人間がそこにいるという、ただ概念で考えれば何でもないことですが、決してこれが同じになっていない。きれいにまっすぐに並んだつもりだけれど、それはまっすぐ並んでいないんです。みんな個性を持って、みんな違った考えを持って、みんな違った顔を持って、みんな違った髪形を持って、そして座っていらっしゃる。その座り方も、みなさん全部違います。同じ座り方は一人もないと私は思います。その個性を持った座り方で、この空間を、この多数の方が、ここに座ってらっしゃるってことは、立派な絵です。自然をみなさん、よくご覧になったことありますか。例えば、庭に木が生えていると思いますね。草が生えてますね。そこへ小鳥が飛んで来て、枝に止まりますね。同じような木があっても、決してそれは、同じものは二つとないのです。この空間に、あなた方が占領している、この姿勢が、絶対に同じものがないってこと、これを不思議に思ったことはありませんか?みんな違った位置で、違った考えを持って、そしてここに点在しているのですね。これが一つの美なんです。美しさなんです。これ、同じにきちんとすれば、これは幾何学。幾何学。幾何学的っていいですね。ジオメトリックスといえますね。ジオメトリックなものじゃないんです。イレギュラーです。レギュラーじゃない、イレギュラーです。この頭の並び方を私見まして、決して真直ぐじゃないです。いろいろジグザグジグザグしながら、一つのラインが並んでいるんです。こっち、横も同じようですね。これがきちんと並んだ時は、また別の美であって、生きてるものがこうやって存在する、それから醸し出される一つのコンポジションというものは、ほんとに自然です。自然って言うものは、本当に美しいんです。	猪熊弦一郎講演「美はいずこに」香川県立丸亀高等学校 1988年7月13日	85歳
資3	鳥のデコイ	美は何気なき所にも静かに存在する	「捨てられた美」芸術新潮 1978年12月号	75歳
資3	鳥のデコイ	デコイって言う鳥ですけど、狸に使う鳥ですけど(中略)本当の写実じゃないんです。全然、鳥のかわいらしいはしてるけど、別のもんですね。それで、これの方がずっと本当の鳥よりも美しいってことですねえ。どうしてかっていうと、そこに、あの、創造があるから。創作があるから美しい。	「美の世界 ニューヨークの一個のリンゴ画家 猪熊弦一郎」日本テレビ 1980年頃	77歳頃
資3	鳥のデコイ	私達は何時の世にも純粋なものを求める 一つ一つ不要なものをばらひのけつつ単化しながらこれだけは無くしてはならない本当にせんじつめられた、程良い蕊を探し求める。	「最初的美・最後的美」芸術新潮 1951年12月号	48歳

資4	ホイットニー美術館50周年記念展ポスター	良い作家のポスターは原画を見ているように生き生きとしていて、部屋の中が明るくなり、私達にいつも元気と勇気を与えてくれる。このポスターは、ニューヨーク・ホイットニーミュージアムの50周年記念展のものである。オリジナルなジャスパー・ジョーンズのリトグラフをプリントに作ったもので、製版も精巧にできている。壁面をこの大きなスペースで埋めると、部屋全体の雰囲気はすっかり違ったものになってしまっていて、前に静物を置いてみても、不思議と異なったものに見えてくる。日本ではよく壁が小さいから、大きな絵はかけられない、と決めてしまっているようだが、思い切って壁一面に大きな絵をかけてみることで、意外に不思議なアトモスフェアを作り上げ、毎日が何とも楽しくなるものだ。	「ジョーンズのポスター」『画家のおもちゃ箱』猪熊弦一郎 1984年9月	81歳
資5	カチナドール3体	私は今三つのカチナドールを持って居る。二つはサンタツフェで買ったもの、他の一つは亡くなったアントニ・レイモンド（建築家）さんがアメリカから、イサムノグチにこつづけて下さったものだ。外部の色彩はすっかり消えて了って木肌の形だけが残し、頭の上に鳥の羽が一つ糸でぶら下がって居る。すばらしく素朴なものである。 私は三年前胃の手術を受けた。退院して我家にやっと帰った時、三つのカチナドールが机上で私を待って居てくれた。退院早々であったが、早速内田君から贈られたスケッチブックに、日本の墨で毎日の様にアリゾナとカチナドールの神話を描き続けた。それは1955年、最初にアメリカ大陸に着いた時の私の大きな感激であったし、私の救いでもあった。私はこの夢を今も描き続けて居る。	『アリゾナとカチナドール』猪熊弦一郎 1982年9月	79歳
資5	『アリゾナとカチナドール』	(アリゾナ砂漠を車で横断した際のこと) 朝から夕方まで、ホテルからホテルへと五日間のさばくの旅は、少しもあきることがなかった。なんとも平凡な所があんなにも美しいのかと驚いた。色も美しい。形も美しい。何も無いということがまた美しかった。	「私の履歴書 猪熊弦一郎 @アメリカへ」日本経済新聞 1979年1月27日	76歳
資6	卵のパッケージ	この面白い形の箱は19世紀のもので、箱の横に1884年のものと書かれている。これを見ていると、世界中の人々が、あのこわれやすい卵の輸送にどれほど苦心したかがよくわかる。(中略) この箱の持つ造形的に美しいバランスと、このこわれやすい卵を輸送するために、いろいろと機能を考えた当時の人々の頭が見えていて、可愛いと言ったらおかしいかもしれないが、純粋で素朴なところが心から好きである。	「卵のパッケージ」『画家のおもちゃ箱』猪熊弦一郎 1984年9月	81歳
資6	卵のパッケージ	角の中の一つ一つに12個の丸がうまくおさまっていて、2箱重ねてみるとちょうど高層ビルディングの様なプロポーションになる。これがもし新しいビルディングだと想像してみると、12階の手ごろの美しいプロポーションを持ったビルである。丸い窓はまだあまり見たことがないが、出来たら丸い窓が並んでも面白い着想だと思う。私は今これを大きな建築に想定したが、新しい彫刻だと思ってみても立派に美しいものだ。木と紙では永続性がないから、ステンレススティールで作し、これをピカピカに光らせる。そして広い公園の緑の芝生に20メートル位の大きさが、もっと大きく高く作ると、たしかに立派な野外の彫刻になり、美しい空間を作り出すと思う。蜂の巣のようなこれらの円筒の空間が、鳩の楽しいアパートになってしまうかもしれないが、思い思いの異なった鳥がやって来て、この中にそれぞれ違ったアイデアの巣を作って住めば、また実に愉快な楽しい美の世界が展開することだろう。	「卵のパッケージ」『画家のおもちゃ箱』猪熊弦一郎 1984年9月	81歳
資7	りんご	日本に出かける前、アトリエのテーブルの上に緑の葉をつけた美しいりんごが一個置いてあった。ニューヨークをたつ前には乙女のほおのようなピンク色のういういしいこのりんごが、私たちの長い不在の間に枯れしぼんでミイラのようになっただけを待っていた。私はそれを箱に入れて、そと東京に持ち帰った。生きものはいつしか時とともに違った美しさに変ぼうする。この小さな生きものはいま、不変のすばらしいオブジェとなって私のテーブルの上にある。	「私の履歴書 猪熊弦一郎 @本当の自分」日本経済新聞 1979年1月31日	76歳
資7	りんご	素晴らしいものづくめの贅沢な生活が美しいというのではない。貧しくともその中に心の美しさを粗末にしない人こそ優れた美を発見しているといいたい。知ろうとする努力はどんなものにも、どんな時にも希望を持つ人に必ず持ち合わせている心である。	「色を知る頭」THE STYLE NEWS 1948年1月1日	45歳
	絵として美しいもの	朝の食事を終えてアトリエへはいると、白いものを見ればどんな紙でも何かを描いてみたくなる。描くと言うより紙の上にたわごとを並べる事になるのかも知れない。白く純潔に光って居る紙を見て居るといつまでも、それは美しい。何も描く必要がない程美しいのである。然しいつまでもこの新鮮な表面を眺めて居ては何も起こってはこない。白い大きなキャンパスでも何かがある上に現れないままではいつまでもただの白い色面でしかない。勇気を出してえい!!と上から下に、左から右方に、一本の太い線を真白な世界に走らせると、もう作品が生誕し始めるのだ。 次から次へと未知の形が生まれ、線が走り、いい形も、悪い形も広がって、それからそれへと生まれ続けるのだ。もうこうなれば絵である。眼をつぶって描いてもよろしい。(中略) 筆は何も知らない子供の様に、夢中になって画面を走り続けるのだ。動けば楽しく、善くも悪くも、一つ一つその瞬間を無意識の中にジャッジしながら、色を作り、形を作り、見た事もない明るい空間や、暗い重い平面の中を走り続けるのだ。 この時ほど幸せな時間はない。頭の中の世界がそのまま画面の上に引越してしまい、宙返りのローラーコースターの様に大きな音をたてて一つの方向に向かって輪を描いて走り続けるのだ。軌道から今にも飛びはずれるかも知れない危険を充分にはらみながら画面の上を飛びつづけるのだ。そしてやがて疲れはてた永い休息の後、冷静な時が頭に帰って来るとまた画面を眺めるのだ。ばかげて居る色も、形も線も、すべてをかかえこんで居る空間も、それから画面のジャッジが始まる。 これからは本来の仕事の開始かも知れない。いらぬものはどしどし塗りつぶしてしまう。塗って、塗って、また白いキャンパスのようになって何も無いものに還元してしまう事もある。さらりと消してしまえばいいが、もたもたと消しそこねた時ほど不愉快な時はない。絵はいじればいじる程、力が強くなると思った昔の技法は私はとらない。消してしまう事も絵を描く一過程であるから、消し方にも美しさもあれば、その反対もある。必要な顔(スペース)を消し残した時、その次元でそれはすでに絵になって居る。	「白いキャンパス」読売新聞夕刊 1990年10月20日	87歳
	絵として美しいもの	古典のデッサンは、人物の足や手や衣裳の皺などを巧みに描込んだものは、年期がかかればできると思いますが、近代のデッサンは、とぎすまされた頭の努力であり、理智の世界であるから、達者だけでは描けないものを持っています。それは近代の作家の素描を見れば解ります。人物の足、首、衣裳の皺を一々描くということよりも、全体の形の面白さを表現しようとする、それが近代の魅力であって、ものをよく見るということが、昔と近代とでは違ってきているのです。	「デッサンについて」教育美術 1950年9月号	47歳
	絵として美しいもの	単純化、突き進んで行くっていかね。そうすると顔なんか、もう目鼻やめっちゃおうってことになるんです。そうすると丸になる。そうすると立体的のボールになるのね。もう、目なんかのゴチャゴチャしたことで、いろいろ人を喜ばせようとか、なんかそういう気持ちがあったけど、そういうものはいらないんじゃないか、一つ丸いものでいいじゃないかって、首は首の円筒でいいじゃないか。胴体も円筒でいいじゃないか。そういうものがどういうふうにならなくて、どういう形になって、面白い一つのバランスを持つてることを考えていくと、結局それは、線で描いてもいいし、丸で描いてもいいってことになってくるわけ。ね。	「カントリーロード'87〜わがふるさとへ/今日のお客様 洋画家 猪熊弦一郎さん」OHK 1987年9月19日	84歳

絵として美しいもの	バラの花を見て美しいと思うことは、誰でもわかる美しさであるけれども、それ以外の美しいってことは何だろうということと考えますと、結局、シンプリシティ、簡単にする、ものを単純化するってこと。いいですか、単純化、いらぬものを退けてしまう。ね。それをどういう風にコンポーズするか、組み立てていくか、っていうこと。	猪熊弦一郎講演「美はいずこに」香川県立丸亀高等学校 1988年7月13日	85歳
絵として美しいもの	一本の線を引くことによって、そこから一つの発想が生まれてくるんですね。ですから、初めから計画的にここに線を引かなきゃいけないっていうことは、もう、絶対ないんですね。もっともっと、自由なもんなんですね。一つの画面という大きな、自分に与えられた世界があって、その中に、右から線を引こうが、上から真っ直ぐ引こうが、はじにちょっと線を引こうがですね、誰もそれを制止することはできないんです。止めることはできないんですね。それだけの大きな自由を持ってるわけです。で、その白い、真っ白な画面の上のどこに点を打つかっていうことで、もうその絵は決定されてくるんですよ。そのギリギリの仕事を挑戦するわけですから、やっぱり相当たくさん絵を描かなきゃいけないと思います。長い間いろんな経験をして、そのバランスっていうものが身に沁みてこない、と、分からないと思いますけれども。それと、強さ、絵の具の強さ、それから、速さ、速さもあります。スピードもあります。それから、薄い、濃い。それから、広さ。それから、盛り上がり立体ですね、スリーディメンショナルになってくること。それから、流れ方。それから、荒い、ラフな表面。あらゆるそういうバリエーションを克服して、そして全体の真っ白なカンヴァス、また、真っ赤なカンヴァスの上に、一つの、三つなら三つの点つものが、本当にもう、一分も左右に動かすことも出来ないバランスを獲得した時は、これはもう名画だと僕は思うんですね。それはとっても難しいことなんです。	「美の世界 ニューヨークの一個のリンゴ 画家猪熊弦一郎」日本テレビ 1980年頃	77歳頃
絵として美しいもの	「絵というはつきつめればバランスでしょうねえ」と、画伯は言った「バランスというのは、精神的な心の表現であり、それは愛のかたまり、というようなことでもあるのじゃないかな、と思っているのです」	「小説新潮の"顔"を描いて三十五年 猪熊弦一郎」『いまこの人が好きだ!』椎名誠 1983年3月(初出1981年12月)	78歳
絵として美しいもの	細かく絞ってみれば、あらゆるものが、もう抽象形態ですからね。だからもう、具象とか抽象とかいうのは、おかしみみたい。	「日曜美術館 アトリエ訪問 猪熊弦一郎」NHK 1992年1月19日	89歳
絵として美しいもの	絵は、基礎を勉強していれば、上手になる必要はありません。私は、どうすれば下手に描けるかと思うこともあります。たとえば目を閉じて絵を描く。人間の顔にしても、ちゃんと描いたつもりでも、自分の思わぬアクシデントが起ってきます。そういうものは、昔は絵だと思われなかった時代がありましたが、今はこのアクシデンタルなものに、発見があるのです。ただ絵具をたらずだけでも、そこに思わぬことが起ってくるのです。これも大きな発見の要素です。	「猪熊弦一郎誌上展」暮らしの手帖 1987・88年12・1月号	85歳
絵として美しいもの	題材の選び方は一人一人によって、それぞれ違っています。(中略)それぞれに好みがあります。これは他から強制出来るものでもなければ、強制すべきものでもありません。(中略)自分に感じたもの、鳥の形態、猫の形態の中に笑を感じたら、それを自然に、自由に、そのままそれぞれの題材として選択すればいいのです。	「近代の美」美術館ニュース NO.46 1954年10月15日 東京都美術館友の会	51歳
絵として美しいもの	近代絵画は明るい感覚をもっていなければなりません。単純化された明るさから生れた美でなければならぬと思います。	「近代の美」美術館ニュース NO.46 1954年10月15日 東京都美術館友の会	51歳
絵として美しいもの	私は特に抽象作品を作ってるとは思って居ない。形象をつきすめて行くことと今の世界を見つけた丈だ。物を正直に写す事から、スタートして、段々に自由を求めて自分の頭が次々に先へ先へと探してもめて歩いて行って居る丈だ。今までに無い形を作り上げる事も、それ等を住まわせる自由なスペースも、要するに緊密な、ヴァランスの世界にふみ込む事になる。単化しつつ、力強く、そして空を飛翔する小鳥の様に、軽く、広く、無限の空間の中に私の頭は飛び立って行って、楽しい事だ。自分が楽しい作でなければ、人に楽しさを与える事は出来る筈がない。つまり、その人、その人の持つて居る変える事の出来ない純粋な心だ。アーティストがこの世に来て何が出来るだろう。余りに我々は小さい。でも、小さな自分を自分で愛する事は許されて居る。	「うれしい小さな人間」新制作 No.2 1981年12月	78歳
絵として美しいもの	人間には意地の悪い気持ちもあればかわいい気持ちもある。それを指先に絵具をつけて、思いのまま真黒く描いてもいいのです。誰はばかすることなく、自由に自分を吐き出すことが仕事なのです。自分の中の心を純粋に吐き出した時に、それが必ず人にも喜びを与えるのです。	「猪熊弦一郎誌上展」暮らしの手帖 1987・88年12・1月号	85歳
美がわかるということ	いま美術館は町づくりにとって必要な存在だと思う。非常にきれいで美しい空間に入っていて日常と違う体験をしながら自らにクエスチョンをつきつける。くだもの屋のリンゴと名画の中のリンゴの違い、美しさの違いを考える空間、それは人間の心をリフレッシュにして楽しませてくれるはずだ。	「猪熊弦一郎人と作品」アート・トップ 1990年10・11合併号	87歳
美がわかるということ	どの世界にいても美しいということがわかる人になってもらいたいです。みなさんが美しい心をもてばみなさんの町や村が、都市が、国家がもっと美しくなっていくにちがいません。そのために絵を通して美をくみとるように勉強してください。	「歩く教室②美術館見学一絵の見方かき方」少年朝日 1950年12月号	47歳
美がわかるということ	美感というものは、個人々々によって異なるものである。私が美と感ずるものに対して、他の誰でもが美と感ずるとは云えない。甲、乙、丙の個々が美と感ずるものには差がある。そして、自分の持っているキャラクター(性格)に合った形式を発見する。	「女性の魅力」ジープ 1950年11月号	47歳
美がわかるということ	きれいな靴下でしょう。みんなやっぱりそれなりに、ただ漠然と履いてる訳じゃないんです。美っていうものをみなさんが意識してそこに履いてらっしゃる。ね。それは大事なサンシビリティって言いますよ。感受性って言いますね。いいレシーバーを持ってるといいことですね。いいレシーバーを持ってると、あらゆるものが幸福になってきますよ。いいレシーバーをみなさんがこれから育てていただくように。ただ漠然とゴヤーッと見るんでなくて、いいレシーバーで感受したことを自分のものにして。	猪熊弦一郎講演「美はいずこに」香川県立丸亀高等学校 1988年7月13日	85歳
美がわかるということ	美しいものに大きな目を開くように。心の美しいことに大きな目を開くように。ね。お願いいたします。	猪熊弦一郎講演「美はいずこに」香川県立丸亀高等学校 1988年7月13日	85歳

【凡例】猪熊の著述、談話記事、インタビュー動画などから、猪熊弦一郎が発した美しいことに関する言葉を集めた。年齢は発行・放映年の元旦時のもの。